

## 現地研修会報告 「川の生き物と森の共生」

期 日：2018年8月7日

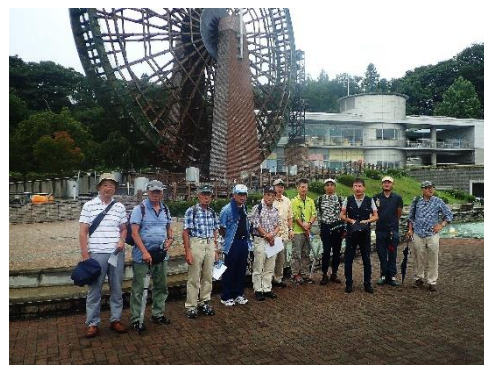
場 所：1) 熊谷市 ムサシトミヨ保護センター  
2) 埼玉県立 川の博物館  
3) 荒川の河原

講 師：芳野 光男

参加者：12名

天 候：小雨

報告者：本田 和彦



〈参加者・川の博物館で〉

台風13号の接近に伴い小雨模様でしたが、連日の異常な猛暑続きとはならず熊谷といえども過ごしやすかったです。

### 1) 午前10:00～「ムサシトミヨ保護センター」

ムサシトミヨを守る会の江守様に保護センター内の一室に案内され、ムサシトミヨの生態、保護活動等についてご説明頂きました。

〈ムサシトミヨのプロフィール〉

- ① トゲウオ科トミヨ属の独立種であり、自然の川で生息しているのは、熊谷市の元荒川のみ。
- ② 絶滅危惧種（I A類）
- ③ 平成元年に埼玉県の魚、平成23年に熊谷市の魚に選定された。
- ④ エサは藻、プランクトン
- ⑤ 10℃～18℃が適温。この為、きれいな湧水に生息する。
- ⑥ 背びれに刺が8～9本あり、危険を感じたとき、身を守るために刺が立つ。
- ⑦ オスが巣を作り、子育てをする。

ミクリ（準絶滅危惧種）という水性植物にヨシで作った巣を作る。

オスはメスを巣の中に招き入れる。メスは卵を産み一生を終える。

オスはヒレで巣の中に新鮮な水を送り込む。

稚魚が巣離れすると、オスは一生を終える。寿命は自然界で1年程度。



〈ムサシトミヨの巣〉 3cm程度

## 〈保護活動〉

- ① 1957年にムサシトミヨ試験研究施設（現在のムサシトミヨ保護センター）が開設される。
- ② 1960年試験研究施設では、ムサシトミヨの為に県により地下水のくみ上げが始まり、1963年に元荒川が完全にくみ上げの地下水となる。（現在6000t/日 のくみ上げ量）
- ③ ムサシトミヨ保護センターから下流400mの区間は埼玉県により「天然記念物区域水路」に指定され、保護活動が積極的に行われている。
- ④ この400mの区域には現在16,600尾が生息している。
- ⑤ 地元のムサシトミヨ保護団体が主体となり地域の保護活動に取り組んでいる。
  - ・川の草刈り
  - ・清掃
  - ・保護パンフレットの作成、説明版の設置
- ⑥ 1985年より近所の小中学校（3校）でも増殖活動が始まり、これまでに14,400尾ものムサシトミヨが元荒川に放流された。
- ⑦ 試験研究施設では、年間約10,000尾を増殖して様々な調査を行っている。



〈玄関前に大きな模型が展示されている〉



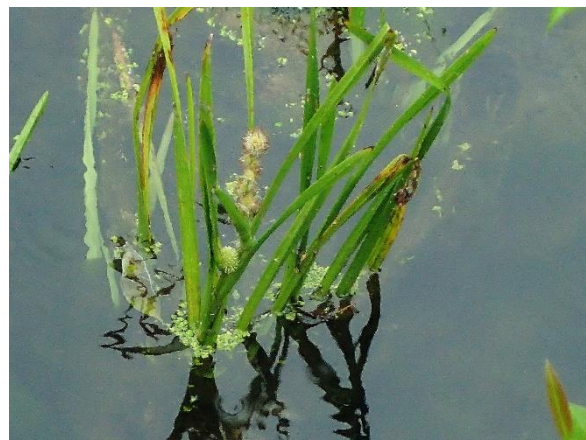
〈試験研究施設〉 生け簀



〈展示室〉 オスとメスを分けて水槽展示されている



〈天然記念物区域水路〉



〈ミクリの群生〉 ムサシトミヨの隠れ場所となる。

## 2) 12:00～ 川の博物館

本館内を見学。イベント上映が開催されており、「鉄砲堰（てっぽうぜき）」について学んだ。

- ① 鉄砲堰とは、川を利用して木材を搬出する方法の一つ。
- ② 明治から昭和 20 年頃まで、荒川支流の中津川で行われていた。
- ③ 谷が狭まり、兩岸の岩が張り出した場所に大量の丸太でダムを作る。

ダムの大きさは、幅 20m×高さ 30mで中央部には放出口を設ける。

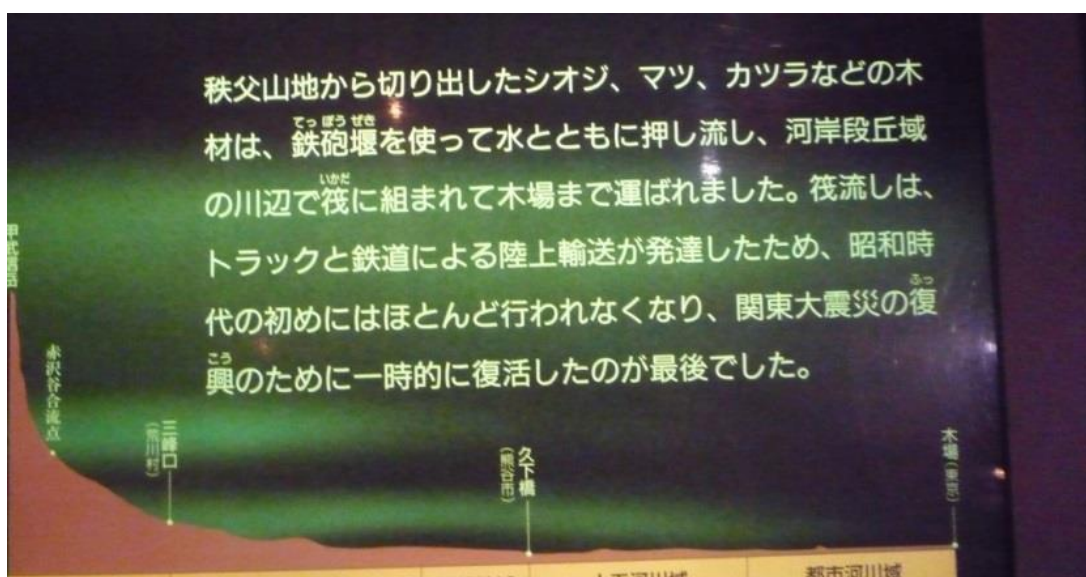
流す木材は、堰の下流にまとめて置かれる。堰に水が溜まるのを見計らい、ベラボウと言われるつかい棒を動かすと放出口を塞いでいたベライタが外れ、物凄い勢いで水が流



れだし、数百本の材木を押し流す。

〈鉄砲堰の模型〉

- ④ 荒川の本流までは距離があり、1 km おきに堰を作り、流していた。
- ⑤ 運送馬車が導入される昭和 20 年頃まで行われていた。



### 3) 14:00～ 荒川の河原(講師:芳野さん)

川の博物館の近くの寄居河原まで歩き、石の同定を行った。

- ① 各自、珍しい石・興味がある石を収集、これらを一箇所に集めて同定を行った。色、模様、硬さ等を図鑑に照らし合わせ、石の種類を特定した。
- ② 当日配布された芳野さん作成の資料によると、荒川は変化に富んだ地質の山地を流れ下っており、特に寄居町の河原では様々な「結晶片岩」が見られるとの事。結晶片岩とは、地中で熱と圧力により、岩石の鉱物が新しい鉱物に生まれ変わったもの。キラキラ輝く平べったい石ころ。色とりどりで美しい。その他、砂岩、蛇紋岩、石灰岩、チャート、泥岩等を確認できた。

